口繪解說

藤堂祐範

口繪に掲載せる般舟讃は今春千二百五十年の大遠忌を迎へんとしつゝある淨土門の高祖唐朝善導大師の御著で、古今楷定の疏と尊ばるゝ觀無量壽經疏の内の行儀分の隨一である。

この版本は寛喜二年大師の五百五十年の遠忌にあたり本書の校合が發起されて、のち二年を經て貞永元年に刊行の功なつたもので、この際特にゆかしみを覺ゆる版本である。

元來般舟讃は承和六年(西暦一四九九)弘法大師の弟子圓行上人によつて本邦に將來されしも、深く御室仁和寺の寶藏に藏せられて、偏依善導と偏に欣慕し給ひし吾宗祖大師も披閲の機なく、その述作中には引文は愚か、その書名さへ出し給はず、宗祖大師の滅後五星霜を經て、建保五年初めて發見されたもので、その發見後は高祖大師古今楷定の疏五部九卷が完備し一宗の所依と仰ぐものである。

掲載の寫眞は京都市富岡益太郎氏の藏本により、卷初二行と卷末刊記とを掲出せるもので、刊記の全部は餘り長文ではあるが資料に富むものであるから別錄しおいた。

この刊記によれば成覺坊幸西が門弟の明信と云ふ僧は本宗の典籍の文字錯誤多きを悲み、在々處々に搜索して校合せしも意に充たず。終に支那に棧り諸州の道俗に大師の遺跡を尋ね、或は書札を街衢に樹て、志を門邑に告げ、或は匠に約して濶く禁庭にまでも之を窺ふたのであると。その求法の熱烈は實に涙ぐましきことで、たま〳〵「八門玄」なる斷簡の一書を得て、せめてもの思ひで將來したのである。歸朝の後幾年ならずして、三部經四卷と五部九卷との開版に

着手したことある。その開版の八部十三卷の書は大部分印行されしものと思はるゝも、今時未だその刊記ある本を發見せぬため詳細は判らぬ、が般舟讃だけが最後になつて開版に着手したらしく。刊記によればこの般舟讃も一句一字不可加減の誡めある祖釋なるも、錯誤不審の點あるを以て、善導大師五百五十年の遠忌に相當する寛喜二年三月廿七日同志兩三人と共に、圓行上人將來の御室本について校合を初め、同四月三日功を終たことある。然るに明信は開版に先きだち示寂したので、貞永元年明信の一周忌に際し、彼の遺約により同門の釋子入眞(刊記に人眞とあるも入眞の誤りなり)が二月三日に筆を始め、十月五日に書寫の功を竟へ開版したのがこの版本である。この富岡氏の藏本は紙質より考へて、鎌倉末若くは南北朝頃の摺寫と見らるゝ。

この貞永版已前に五部九卷の印行がありたるやう思はるゝ。そはこの貞永版の刊記の割注に「八部十三卷中事讃上下今時初開雖有先印寫今勘出於傳部者聊無先刊」とある、この文意難解で明了しないが、有先印寫とあるから、貞永版已前に五部九卷全部ならずとも、その内の或部が開版されてあつたらしい。がその刊本も今日では見當らず、また文獻もないから、他日の研究に讓る外はない。なほこの外に京都大藏會第一回の目錄には正安四年版が出て居る、これは貞永版の覆刻と思はるゝも、和田維四郎氏の訪書餘錄に刊記の末尾が僅か影印されてあるだけで、遺憾ながら今時寓目することを得ないから、これも他日の考究に讓りおく。

そこで昨秋京都の大藏會で眼福を得た五部九卷の古版本に就て仔細に研究するに、德川已前の開版本のみにて五種の刊本があると思はるゝ。

第一　前に解說した貞永元年版

第二　龍谷大學所藏の觀念法門、大谷大學所藏の往生禮讃の二本は共に同一版である、若し他日刊記の具備せるものが發見さるれば、或は貞永元年版已前の開版かも判らない、書體、墨色、紙質等共に優秀で、鎌倉初期、若くは中期を

降らぬ、實に立派なものである。

第三　群馬縣太田町大光院所藏の般舟讃は南北朝頃のもので昨昭和四年淨土宗々寶に指定されたもので、書體宋朝の風格を帶びたるは、全く當時將來されたる宋版大藏經等の版經及び五山版の影響を受けたものである。

第四第五　知恩院、龍谷大學、久原文庫等に所藏せらるゝ五部九卷で、これ等は往生禮讃の卷末刻記に「知眞」とあるから、從來知眞版とせられあるも、知眞は元亨頃在世の人であるし、またこの版式から見ても合はない、多分上に擧げたる第二若くは第三が知眞版で、この第四第五の版はその複刻と見るべきであらう。これ等知恩院等に所藏されてあるものは一見同一版の如きも、字劃等に多少の相違あり、何れの藏本にも刊記がないから、何人が何時出版したか明了しないが、あまり年時を隔てずしてこの二版は開版されたものである。

要するに德川時代已前に五部九卷の現存古版としては、貞永元年版、鎌倉初期版、南北朝版、足利中期版二種、已上の五種あるを知る。

なほ大山名利の寶庫を廣く搜索したならば、この五種已外正安版等の古版等二、三種は發見し得ることならん。開版事業の困難なる時に際し、還愚を本領とせる淨土教徒がこの大册を數回に涉り開版せる弘法の精神と文化に貢獻せし功績とは澆末の徒の龜鑑とすべきである。

いま貞永版の紹介に併せ五種の古版本のあることを述ぶ、なほ詳くは今春淨土宗典刊行會より拙著「淨土教版の研究」を出版する豫定につき御參考を願ひたい。